

エッセー

# 『風評被害』

## 『原発震災と十五年戦争』

荒武一彦

### 「風評」って？

東京電力・福島が起こした「3・11原発震災」で、「耳にたこ」の言葉に、「想定外」と並んで「風評被害」がある。「風評」とは、「世間の評判」とか「うわさ」のことであるが、それにはデマとホント、両方のケースがある。

政府が「風評被害賠償」という場合は、基本的には「出荷停止」とか「摂取制限」の指示を受けた農作物、水産物などが対象にされている。私は、これを風評被害とは言わない。停止や制限の根拠の正否はともかく、何らかの公式的な措置の結果であり、根も葉もない「風評」がもたらしたのではない。まさに「実害」（だから問題がないと言っているのではない）である。もつとも、原発被災地に関係する総ての物が「被曝汚染」のレッテルを貼られ、国の内外で白眼視され、子供たちが差別を受けるというひどい話まで伝わった。政府や東電の情報開示の拙さ、隠蔽体質もあって、

疑心暗鬼・過剰反応・自粛の側面はぬぐえないが、こちらは「風評被害」と言ってもよいであろう。

ところで、本稿で扱うのは、デマ（虚偽の言説）の流布、いわゆる流言飛語による被害についてである。これで真つ先に思い出すのは、関東大震災下で発生したいわれなき朝鮮人・中国人虐殺事件で、これは被害というより「加害」と言うのがピッタリする。

### 「安全神話」メルトダウン

原発震災で最大・最悪の風評被害は、脆くも崩れた「原発神話」によるものである。これらで、学者、政治家、企業・経済人、評論家などいわゆる「原子力村」といわれる人たちが（原発期間（ふうかん）との揶揄もある）が、人気タレントまで動員して、こぞって「絶対的安全性」を声高に唱えて続けた。国民を「原発ユートピア」へマインド・コントロールし、「原発ルネサンス」なる国策の素地固めを推し進めて来たのである。

だが、今回の原発事故でバベルの塔ならぬ「安全神話」は根こそぎ倒壊し、苛酷な惨劇をもたらしている。「原発は安全」というデマ―「風評」を蔓延させた結末が、取り返しのつかない深刻な「被害」を生んだのである。原発差し止め訴訟で、「安全」を証言した有識者達は、偽証罪に問われないのか、偽計国策を推進した政治は犯罪ではないのか、と思いたくなる。

それに止まらず、事故発生後も、「直ちに危険ではない」「体調に影響ない」という「安全」情報を性懲りなく撒き散らし続けた。

次は、「原発をなくしたら電力不足になる」という情報発信である。「原発が日本の発電量の三割」というのを論拠にしているが、「エネルギー・経済統計要覧」（藤田祐幸氏作成）によると、一九六五年以降、日本の最大電力は火力＋水力の発電能力を超えたことは一度もない。原発は終日稼働させ、需要に応じて火力や水力で需給バランスをとっているのであって、「原発不可欠」の理由付けにはならない。現実には、震災発



全国で繰り広げられ、岡山市目抜き通りでも500人がデモ行進した『フクシマに想いをよせて~6・11脱 原発100万人アクションin岡山』

「この非常時に何を言うか」と恫喝し、抑圧・排斥しようとするものである。

## バッシング・キャンペーン

「風評被害」には、もう一つのパターンがある。ホントをデマと中傷し、地球温暖化対策にあやかた「仮面」だったのだ。

正論であっても異論だと攻め立て、抹殺を試みるのである。陰湿である。

総務省が四月六日、関係業者向けに「東日本大震災に係る流言飛語が電子メールや電子掲示板等で流布されており、法令や公序良俗に反する情報の自主的削除を含め、適切な対応をとるよう」要請した。「流言飛語」や「反公序良俗情報」を誰が判断するのか。恣意的に遣られると、言論封じになりかねない。

俳優・山本太郎の場合は、インターネットでの攻撃による犠牲者の一人である。山本は福島原発事故以後、発言やデモ参加などを通じて反原発を訴え続けていたが、5月末、「事務所や他の役者に迷惑をかけたくないので、事務所を退所する」と、事務所サイトやツイッターで公表した。具体的な経緯はよくわからないが、山本の反原発的言動に対して、多分事務所などに激しい抗議や非難が飛んできた為、身を引いたものと思われる。職場を辞めるといふ重大な決断に追い込まれたわけで、「七、八月に予定されていたドラマが降板になった」という噂も聞かれる。

原発の危険性を指摘し続けているある学者のホームページにも、批判の書き込みが後を絶たない。

▽ある教師が授業でチェルノブイリ事故の話をしたところ、その後、あるところから「安全な原発」のパンフレットが送られて来て、それ

生後、全国の前発五〇数基のうち七割近くが稼働停止の状態になっているが、節電の不便はあっても、市民の日常生活が立ち行かない場面は無いに等しい。さらに、自然（再生可能）エネルギー利用に本格的に取り組めば、「世界のエネルギー消費の七七%を供給可能」（IPCC報告）など、原発の穴埋めはちゃんと果たせるという科学的試算は山ほどある。現に、ドイツは「脱原発」の道を選んだではないか。原発がなくても困ることはないのである。「電力飢餓」（風評）を言いふらすことで、「原発受容」（被害）へ誘導しようとしているのだ。

三つ目は、「自然エネルギーはコスト高で安定供給が不能」というカウンター・アタックである。「原発は一kw五〜六円。自然エネルギーは数倍」と、「安上がり」を強弁してきた。しかし、アメリカで昨二〇一〇年、太陽光と原子力との発電単価がクロスオーバーし、太陽

光の方が安価になったことが報告されている。原発の発電単価の算出では、実際のコストのうちカウントされてないものも多く、今回のような賠償金はじめ天文学的巨額の事故対策経費は含まれていないのである。原発の寿命は三〇〜四〇年とされ、その後何十年もかかる廃炉処理、放射線汚染物質の最終処理などを考えると、「高価な危険物」としか言いようがない。

最後極め付きは、「原発はクリーン」の大合唱であった。「発電時にCO2を出さない」というのが殺し文句であった。これは事実かもしれないが、今日の前にしている福島原発の汚染絵図を見れば、これが詭弁であったことは多くを語る必要はない。ミリシーベルトとかベクレルとか混乱するだけの議論は止めにしても、二五年前の事故が残したチェルノブイリの現状を見れば、「放射能汚染は何十年、いな何世代も続く」のである。一旦汚染された国土、海洋そして何よ

りも人体は、放射能に蝕まれ続けるのである。「クリーン・エネルギー」とは、地球温暖化対策にあやかた「仮面」だったのだ。

を授業に使うよう言われた。

▽野外ライブで反原発ソングを歌っていたミュージシャンにブーイングが起きた—という話も聞く。

さらに、ジャーナリスト・上杉隆が、民放ラジオのレギュラー番組で、東電などの「情報隠蔽があるのではないか」と発言したところ、放送終了直後に「今月いっぱい辞めて貰います」と一方的に言い渡された。また、キャスターをしていた通信衛星テレビの番組で、何人かの反原発派ゲストを登場させたところ、スポンサーの電気事業連合会が「スポンサーを続けられない」と、キャスター交代を求めてきたという。「原発神話」をこき下ろす輩は「不穏な思想の持ち主」だという風潮を作り出そうとしている。明らかに萎縮効果を狙った「風評プロパガンダ」といふべきものである。

### いつか来た道

満州事変からの十五年戦争期、「神州不滅」「鬼畜米英」「八紘一宇」などの叫び声が、日本全土の隅々にまで横溢した。国民はこれを頭から信じ、呪文のように唱え、アジア・太平洋戦争へと煽られ、駆り立てられていった。

この体制にいささかなりとも抵抗の気配を見せるものなら、「非国民」の烙印を押され、容赦ない弾圧の礫を浴びた。民衆生活の中で交わされる厭戦、非戦、反戦の「私語」は、流言飛語

即ち「怪しからん評判」として厳しく摘発、処罰された。刑法（不敬罪など）、軍機保護法、言論・出版・集会・結社等臨時取締法などきめ細かい法網が張り巡らされ、庶民の一挙手一投足が監視された。（岡山の記憶」第一三号Ⅱ拙文「壁の物言う時代—戦時期『防諜社会』を参照して下さい）

そして、行き着いたところが昭和二〇年八月一五日の「破局」であった。「勝った、勝った」の大本営発表に酔わされてきた国民には、これこそまさに「想定外」の悲劇であった。振り返ると、何もかもが虚構、幻想でしかなく、ただ踊らされてきただけだったことを思い知らされた。日本人は、この時尊い学習をしたはずである。

今、「3・11福島原発震災」を目の当たりにして、また同じ轍を踏んで来てしまったのか、と臍を嘔む思いである。

十五年戦争は「総懺悔」によって、「戦争責任」がうやむやになり、それまで黒色シャツを着て闊歩していた人たちが、それを脱ぎ捨て白色シャツに着替えて生き延び、颯爽と徘徊し続けた。そして、またぞろ黒色シャツがちらほら見え隠れしだしているのが現状である。震災でも、これを奇貨として「国家緊急事態基本法」論議が囁かれ始めており、「戒厳令」再来の予感さえする。

原発震災の「風評被害」も、「戦争責任」と同

列の問題である。きちんとけじめをつけておかないと、またぞろ「原発崇拜」が蠢き出す。「神話」再生を目論む動きはこれから執拗に続けられるであろう。懲りない面々は、早くも「さらなる安全性の確立」を求め、原発にしがみつこうとしている。

政府の事故調査・検証委員会委員長に、「失敗学」の権威が据えられた。原発震災に係わるもろもろの敗因を探り、教訓を得ようというのだろうか、「ヒューマンエラーの歴史」は二度と繰り返して欲しくない。

「風評」に惑わされてはならない。

「神話」の独り歩きを許してはならない。

（あらたけ かずひこ）